

研究会設置の背景と目的

金田房子

古典籍の画像がデジタル公開されることによって、古典籍活用の新たなニーズが生まれ、研究の可能性が様々な方面に広がってゆくことが期待できる。これまで古典籍の文献は、事前の申請と許可を得て（専任の教員でなければ推薦者が必要とされる場合もあった）その地に出向いてようやく目にすることのできるもので、利用は国文学や歴史の研究者、それぞれの地域の郷土研究家に限られていたと言ってよい。

近年、国立国会図書館や早稲田大学附属図書館などで、大規模なデジタル化の動きがあり、古典籍は次第に開かれた存在となってきた。プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は、その動きを大きく推進するもので、30万件の日本古典籍の画像公開を目指すものである。

画像データの活用の際に重要な役割をもつのが画像コードである。それぞれの画像に一位のコードが付与されることにより、一つの画像が特定される。これまで、研究者が古典籍を用いた場合、所蔵先・書名・何丁目（頁数）か等を明示したとしても、その資料に他の研究者がたどり着くには様々な制約があった。しかし、画像コードを手元の端末に入力してクリックすることによって、ただちに画像が表示され、検証作業が行われるとすれば、議論が容易になり研究が速やかに進展する。また、画像コードのアクセス件数という形で活用実績が可視化されることにより、ニーズへの対応が容易になり、さらなる研究の方向性が生み出されてくることも考えられる。

本共同研究では、利用者の利便性に即した画像コードを提供することを目的とする。一義的には検索しやすいコード、論文等に引用されやすいコードの策定が目的である。

現在用いられている「文庫コードー請求記号」でも、典籍については特定が可能ではあるが、上述のような機能を果たすために、今後も有効であるのか。また、典籍コードの、画像コードへの適合性については、再検討する必要があるだろう。

一方で画像コードは、今後技術の進展に即して、現在のような英数字の利

用にとどまらない様々な可能性が広がってゆくことが予想される。コードを用いてさらに関連する事柄の画像を検索してゆくことができれば、活用の可能性は大きく広がるであろう。利用者は世界中どこからでも論文等に用いられている資料の確認ができるだけでなく、コードから関連する書物を次々に視野に納めてゆくことができるのである。現状では様々な制約があるにせよ、未来型とも言えるこのようなコードの可能性も視野に含めて議論を進めたいと考えた。

実用化とその先へ、現在もさまざまなモノに付与され機能を果たしているコードの性格を確認しつつ、活用の可能性を最大限に引き出せるコードのあり方を探ってゆきたい。

さらには、国際標準として通用するためには、どのようなコードが適切かを検討する必要があるだろう。国際的なコード付与の動きについても目配りしつつ、本年度（2014年度）は、まずは実用化に向けての検討を行ってゆくことが目標である。

本共同研究は、国文研研究者と図書館司書資格を有するセンター課員が互いの経験を生かしつつ、中心になって行った。これは文学分野と図書館情報学分野という異分野融合的研究の試みの一つと位置づけることができよう。